

随泉寺寺報

平成 25 年（2013 年） 1 1 月号 第 5 1 9 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

後期門信徒講座

講師 住職自修

講題 『お葬式の意味』

■葬送儀式 ～故人の生涯をとぶらい、縁の重さに思いを致す儀式～

この頃、家族葬で葬儀をされることが多くなりました。

いろんな事情で家族だけでそっと送ってやりたいというのも、もちろんあるでしょう。

しかしよく考えてみると「いのち」は家族だけのものではありません。周りのいろんな人々に支えられて生きてきました。あの人にもこの人にもお世話になりました。縁のあった人々がみんなでお見送りをさせていただく。最後にお別れを言いたい人もあるでしょう。《あの時はごめんね》と謝りたい人もあるでしょう。

葬儀は、故人の生涯をとぶらい、自分との縁の重さに思いを致す儀式です。

また、この悲しみを癒すもの、生と死を越えて じ合う道を示すものです。まことに仏法こそ、人間の悩みの中から現れ出た光であり、心の闇路に届く、慈悲の呼び声です。親鸞聖人は、その弟子明法房の死を知ったとき、「ご往生、めでたく候」と手紙を出されました。なすべきことをなし終えることとしての死、めでたき死でありたいものです。もちろん、自らは寂しく、残る者には悲しいに違いありませんが。葬儀は人生完成記念式典でもあるはずです。その人らしい葬儀を執行したいものです。

10月の法座予定

11月 2日 …………… 本部役員会

11月10日 …………… 掃除 望ヶ丘

11月14日昼席午後1時より …………… 後期門信徒講座

11月15日朝席午前10時より …………… 役員研修会 おとき

11月15日昼席午後1時より …………… 後期門信徒講座 映画『阿弥陀堂だより』

12月 2日午後4時より …………… 門信徒会本部役員会 引き続き忘年会

☆ 映画 『阿弥陀堂だより』

【あらすじ】

東京に住む上田孝夫と美智子の夫婦。

孝夫は売れない小説家、美智子は大学病院の有能な医師だった。

ある日、美智子は流産をきっかけにパニック障害という心の病にかかってしまう。

都会の生活にも仕事にも疲れきっていた2人は、孝夫の故郷である信州へ移住することを決心した。2人は移り住んだある村で、村の死者がまつられた阿弥陀堂で暮らしているおうめ婆さんを始め、様々な人々と出会った。

喋ることが出来ない難病を抱える少女・小百合は、おうめが日々思ったことを書きとめ、村の広報誌に“阿弥陀堂だより”として連載していた。

劇的なストーリーは無く、淡々と四季が移り変わるかのようにストーリーは進むのだが、



その中にも村の死者をまつる阿弥陀堂を守りながら暮すおうめ婆さんの生き方や、上田夫妻の凜としたまでの生き方等をし、都会から移り住んだ主人公夫婦の心の再生を描いている。

夜、眠れない時は川の水の流れる音を聞き、自分も一緒に流されているといつの間にか眠ってしまう。

こういう自然の中で暮すというのが、日本ではごく普通に生きるという姿だった事かもしれないと思う。

ふと思った。

最近、こんな風に景色を楽しみながら歩いた事ってあったらどうか？と。

失われてしまった、忘れてしまった風景、足元ばかり見ていて見えなかったもの。

そういうものにもちょっと目を向けてもいいんじゃないかな？

☆ 役員研修会 11月15日午前10時～

11月15日朝席は役員研修会です。とはいっても皆さんもどうぞお参りください。出来ればたくさん誘ってお参りください。今年の2月18日にビデオで寸劇をしました。3本立てです。1幕は『愛する人を看取る』 2幕は『葬式はどうする』 3幕は『悲しみを越える道』です。そのビデオを見ます。皆さんで一緒に考えましょう。

☆御礼

| | | | | | |
|-------|---|-----|---------|----------|-----------|
| 永代経懇志 | 金 | 拾萬円 | 植木 彰殿 | 故 植木 始様 | 特 永代経志として |
| 永代経懇志 | 金 | 拾萬円 | 乗松 満寿子殿 | 故 乗松 幸男様 | 特 永代経志として |
| 永代経懇志 | 金 | 五萬円 | 木原 孝子殿 | 故 木原 数義様 | 特 永代経志として |

☆御礼

| | | | | | |
|-------|---|----|---------|----------|---------|
| 門信徒会へ | 金 | 一封 | 植木 彰殿 | 故 植木 始様 | 香典返しとして |
| 門信徒会へ | 金 | 一封 | 乗松 満寿子殿 | 故 乗松 幸男様 | 香典返しとして |

『「生きもの」すべて平等である』 1 1 月（武内紹晃）

「いのちは尊い、平等である」とは美しい言葉ですが、それだけに現実にはその逆の姿が目につきます。仏教には「あらゆる衆生」つまり、いのち有るものすべてが救われるという考えかたがありますし、日本全体には、天地自然のめぐみの中に、生かされているという受け取りかたもあります。それは春になると、特に、感じられるところですよ。

しかしながら、それだけでは、差 を無くす力、自然環境を護る力にはなかなかならないように思われます。人間一人ひとりの責任、人々が作っている社会の責任が十分に自覚されないからです。

親鸞聖人の教えを伺いますと、先ず、私がどのように生きているか、何を依り所に生きているかが問われます。他の人と比べて、見下したり、劣等感を持ったり、美しい花を見ても、お金で数えたりでは、いのちの尊さが感じられません。

自力のこころを離れること、阿弥陀如来さまに無条件に支えられ導かれている私に気付くことは、自らのいのちに自信を持つことであり、他のいのちと共に歩むこころを開かれることにつながります。

南無阿弥陀仏とお念仏申しつつ、私の務め、この社会の務めとして、いのちを大切にしていきたい。

浄土真宗本願寺派門主 大谷光真著「「あけぼのすぎ」― 浄土真宗一口法話 ―

☆ 煩惱にまみれた凡夫こそ

ジェフリー・アーチャーという英国の現代作家に『隣の芝生は…』（新潮文庫『十四の嘘と真実』に収録）という小説があります。これはロンドンの銀行を舞台にした短い作品です。最初に登場するのは、その銀行の軒下で暮らしているホームレスの男です。彼は定職を持ったドア・マンが羨ましい。一方、ドア・マンは早く出世して、暖かい建物内で仕事ができる受付になりたい。受付は管理職である係長になりたい、そして係長は部長に、部長は頭取にと、それぞれが上級の職を夢見ています。しかし皆が皆、心の中ではさまざまな問題を抱え悩んでいる。

そして最後は、実際には倒産しかかっているこの銀行の会長が登場し、夜中にこっそり帰宅します。頭取は寝ているホームレスの男を見て、彼は気楽で羨ましいと思う……というストーリーです。 隣の家の芝生というのは、光線の加減で青く美しく見えるものですが、その場所へ行くと、実際には遠くからは見えないゴミが落ちていたりするものです。地 が上がったら上がったで、お金が儲かったら儲かったで、次々に新しい悩みが生まれてくるのが、人生でしょう。

『仏説無 寿経』 の中にも、
「田あれば田に憂へ、宅あれば宅に憂ふ。……田なければ、また憂へて田あらんことを欲ふ。宅なければまた憂へて宅あらんことを欲ふ。」

（註釈版聖典五四頁）

というたとえ話があります。人はだれでも、自分と他とを比較して隣人を羨ましく思い、嫉妬するのです。

阿弥陀如来の本願は、まさにそうした煩惱にまみれた私たち凡夫こそを、救いのお日当てに説かれています。次のご和讃には、そうした心がはっきり表されています。

（『高僧和讃』同五八〇頁）

本願力にあひ れば

むなしくすぐるひとぞなき

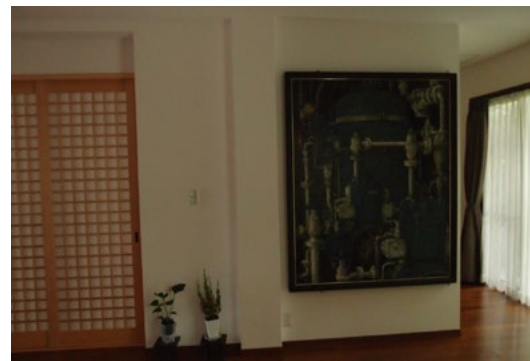
功德の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし

阿弥陀さまのご本願のお救いにあわせていただいたものは、むなしくいのちを終わってしまう人は一人もいない。阿弥陀さまの功德が海のように満ちていて、私たちが持っている煩惱の汚れた水も分け隔てることなく、すべて救いとられていく、という意味です。私たちは、如来の本願が、他のだれでもない、この私のために説かれているということを、もう一度しっかり受けとめたいものです。



☆絵を寄贈して頂きました。



題名 【連理】

作者 【椿谷 俊】

二紀会第54回（平成12年 2000年）公募展入選作品

連理 1、一本の木の枝が他の木の枝と連なって木目が
じ合っていること

2、夫婦、男女の間の深い契りをたとえている。

この作品は椿谷 俊さんが二紀展で10年連続して入選された最初の作品であり、以後一連の【機械の絵】の出発点とも言える力作です。

私はこの一連の絵を見させていただくと、描いてあるのは『エンジン』の絵ですが、私は人間の体が描いてあるように思えます。複雑に絡み合った部品と経路は、人間の臓器と血管のように見えるのです。そしてそれはどの部品も、どのパイプもつなぎ合って、重要な構成をなしています。どのねじ一本も必要で、大切な大切なねじです。どの小さい部品が傷ついても支障が起きます。まさしく【連理】です。人間の体も同じですべて大切な大切な部品です。